

第59回日本小児保健協会学術集会 シンポジウム5

ワクチンで防ぐ子どもの病気

保育園の子どもたちと職員を感染症から守るために

～感染症の発生状況とワクチンの接種率～

藤 城 富美子 (全国保育園保健師看護師連絡会 / 杉並区立保育園)

I. はじめに

全国に約23,000ヶ所の認可保育所(園)があり、2010年には216万人を超える子どもたちが保育されている。しかも生後57日目から就学前の年齢であり、長時間にわたって生活を共にしている。これまでもインフルエンザをはじめ、ノロウイルスなどの感染性胃腸炎、RSウイルス、水痘、流行性耳下腺炎、咽頭結膜熱、A群溶血性連鎖球菌咽頭炎、マイコプラズマ肺炎等、さまざまな感染症が数多く発生している。乳幼児の免疫力および体力は弱く、また衛生観念も不十分であるために、感染症が施設内に持ち込まれた場合、感染症流行防止には多くの困難がある。一方、保育施設は保護者の就労機会の保障等も担っているために、通常幼稚園や学校等では閉鎖されるようなインフルエンザの集団発生に際しても、多くは閉鎖することなく運営され、感染が広がり、長引くことも多々ある。

また、これら感染症等の発症は、子どもを通じて各家庭内に感染伝播し、更に地域へと広がっていくことがあり、保育園が地域の感染症拡大の原因になる場合もある。

II. 日々の保育での感染症の発症状況

1. 乳児保育の実態

保育園利用児童数の割合は、3歳未満児(0～2歳)が24%(厚生労働省2011)と入園している児童数の4人に1人となり、さらに待機児童数も増え約83%が3歳未満児と低年齢児の需要が高まっている現状である。

保育されている児童は、首の座らない生後57日目からの子どもが集団で保育されている。特に予防接種がまだ済まない年齢で、感染症に罹患すると重症化しやすい子どもたちがいる。

乳児期の子どもの特徴として、なんでもなめて確かめ、よだれや鼻水がつき、床を這い回り遊び、おもちゃに鼻水やよだれがついたまま他の子どもがなめるなどが繰り返される。また、排泄後の始末も、手洗いやマスクなど衛生習慣もまだ身につけていない。さらに、子ども同士がじゃれ合って遊ぶため互いが触れ合うことで感染の機会が多くなる。

2. 1年間の感染症発症状況

日々の保育においては、突発的な発熱などの急性期の子どもたち、また、急性期を脱していないと思われる症状の子どもも保育されている。それに子どもの症状から急性期、回復期、再発など明確には分けることは難しい。急性期を脱したかどうか、病気の後いつから預けるかは、仕事の都合なども考慮して保護者が判断するため、実際の子どもの病状からすると集団に入るには早すぎる登園になっている場合がある。

(1) 各クラスの1年間の平均病気欠席日数

0歳で約20日位、1歳で約16日位、約2歳で10日位、幼児(3～5歳)クラスでは約6～7日前後となっている。

(2) 毎年の感染症の発症状況(図1)

① 4月が最も病気欠席日数が多く、特に、初めて集団を経験する0・1歳児が日々の病欠児の大半を占め、症状は発熱・嘔吐・下痢が多い。

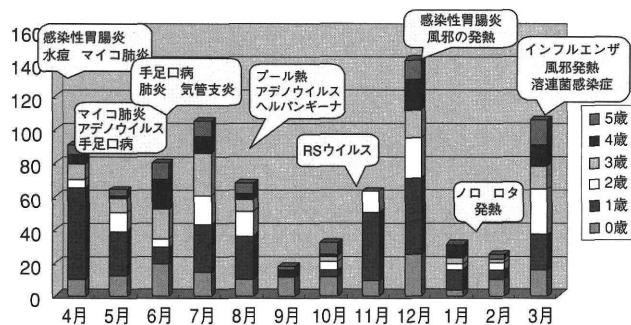


図1 1年間の月別病欠席状況

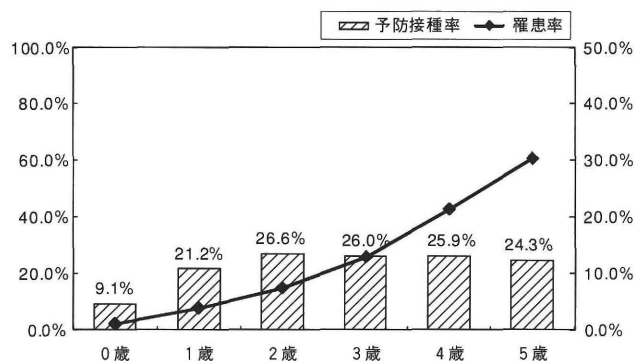


図2 ムンプスの予防接種率と罹患状況

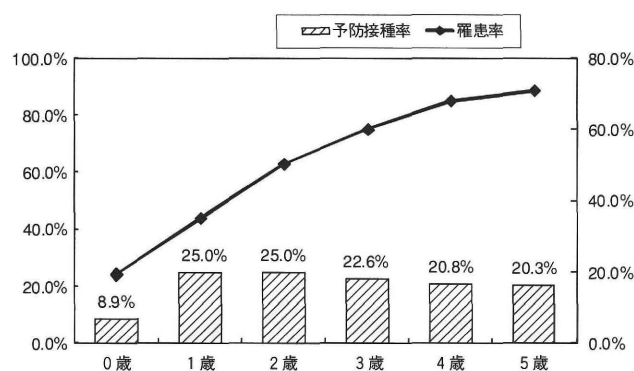


図3 水痘の予防接種と罹患状況

- ② 6～8月は、水痘、りんご病、手足口病、ヘルパンギーナ、アデノウイルス(プール熱)の流行がある。
- ③ 11月以降は、ノロウイルス、アデノウイルスなどの感染性胃腸炎やRSウイルス、肺炎、インフルエンザの罹患児が増えている。

Ⅲ. 予防接種率および感染症罹患状況

保育園には、個々の健康と集団の健康を守ることが求められるが、特に、予防接種があるにもかかわらず、水痘、ムンプスは保育園での流行はめずらしいものではない。その流行はクラスを越え施設全体、家族や地域にも広がり、長期にわたって流行が続く場合もある。

る。全国保育園保健師看護師連絡会が2011年に行った予防接種と罹患状況の調査(公立72園、私立40園: 0～5歳児全園児数合計19,622名(0歳児1,620名、1歳児2,740名、2歳児3,387名、3歳児3,375名、4歳児4,033名、5歳児4,067名))で明らかになったのが、定期接種であるBCG、ポリオ、DPT、麻しん、風しんの接種率は90%と高いが、任意接種である水痘、ムンプスの接種率がいずれも2割程度であった。中には重症化して入院、また難聴になった園児の報告もある。

アンケート調査の結果から

(1) 定期接種の予防接種率と罹患状況

- ① BCG接種状況では、2010年には0歳児の約96%とほとんどの子どもが受けている。罹患の報告はない。
- ② ポリオ接種状況では、いずれも1回目はほとんどの子どもが受けているが、2回目になると2010年で87%とやや低下している。罹患の報告はない。
- ③ DPT接種状況では、追加接種が70%程度と低下している。罹患の報告はない。
- ④ 麻しんの接種と罹患状況では、90%の接種状況で100%に近い状況にはならない。2006年にMRの2期が導入され5歳児81.7%の接種報告がある。2010年の罹患児数は44名(0.2%)の報告があった。
- ⑤ 風しんの接種と罹患状況では、90%近い接種状況である。2010年の罹患児数は、61名(0.3%)の報告があった。

(2) 任意接種の予防接種率と罹患状況

- ① ムンプスの接種率が、平均23.7%(罹患率23.5%)程度である。罹患率は4歳児で20%、5歳児で3割の子どもが罹患している(図2)。
- ② 水痘の接種率は、平均21.4%(罹患率55.4%)程度である。罹患率は0歳から年齢が上がるにつれ上昇し、5歳児になると7割の子どもたちが罹患している(図3)。

Ⅳ. 感染症の予防および対策

1. 保育所における感染症対策ガイドラインの活用を

長年、保育園での感染症対策や登園基準は、学校保健安全法に準じ取り扱われていた。しかし、低年齢児の乳幼児の特性を踏まえ2009年に厚生労働省保育課からガイドラインが発表された。登園基準の“めやす”として下記の2点を挙げている。

- ① 園内の感染症発生や流行につながらないこと。

② 子どもの健康（身体）状態が保育園の集団生活に適応できる状態に回復していること。

個々の子どもの回復状態を配慮しながらの対応が求められる。

2. 子どもの健康管理

(1) 日々の子どもの健康観察

感染症の早期発見および早期対応には、日々の子どもたちの健康状態を記録し把握する必要がある。その際、一人ひとりの健康状態に加えクラス全体、全園児の健康状態を把握することで感染症の発生状態や予防策を講じることができる。

(2) 感染症罹患状況と予防接種状況の把握

子どもたちの予防接種歴・罹患状況をきちんと把握しておくことである。入園時に母子健康手帳を確認し予防接種歴・罹患歴を把握、入園後には毎月新たに受けたワクチンはないか確認し記録する。その際、クラス毎に一覧表で把握できる表を作成する。クラス内で流行があった場合には、ワクチンの接種児・未接種児が一目でわかるようにしておくことで迅速な対応ができる。予防接種の勧奨については、入園の健康診断の際に、嘱託医が入園までに受ける予防接種やその後のスケジュールを立てて薦めている。同時に、保護者会や保健だより等で継続的に勧奨し、感染症の発症があった時には個別に対応をしている。

(3) 保護者との情報共有

感染拡大を防ぐためには、保護者の協力は重要である。子どもに感染症が疑われる症状があった場合には、園内に持ち込まないように協力を依頼する。園内で感染症が発症した時には速やかに掲示やお便りで情報を提供する。さらに、家族内での感染症の発症があった場合には、速やかに園に連絡を入れる等日頃から連携をとる。

(4) 感染症サーベイランスの活用

日々保育園で発生している感染症情報を自治体や保健所、園医とリアルタイムで情報共有できることは、感染症の早期発見・早期対応をするうえで重要なことである。厚生労働省が勧める「保育園サーベイランス」を使うことで、地域や近隣の状況も把握できるため積極的に活用を勧めたい。

V. 職員の健康を守るために

保育園で働く職員は、子どもからの感染を受けやす

い環境にあると同時に、感染の媒介にならないよう個人衛生には十分配慮する必要がある。手洗いその他衛生レベルの向上とともに、子どもの周りにいる大人の予防接種と罹患状況を把握し、未接種者には接種の勧奨等をして感染症の流行から子どもたちを守っていくことである。

①職員自身の予防接種歴・感染症罹患状況の確認

- ・ B 型肝炎、麻しん、風しんなどの抗体獲得があるか確認しておくが良い。また、例年のインフルエンザワクチン接種を積極的に勧める。

②感染予防に基づいた傷病児の扱い

- ・ 手袋・マスク・ガウン等を用い感染症予防を意識した対応をする。
- ・ 鼻血・傷や湿疹の掻き壊しなどの浸出液・鼻水・咳・便などの取り扱いは標準予防策での対応を勧めている。

VI. おわりに

保育園看護職として日々子どもの健康状態の把握に努め地域や家族の健康にも目を配り、感染症発症時に適切な対応ができるように配慮している。

保育園は、保護者も含め保育士はもちろん、パートや実習生、ボランティアなど多くの大人の出入りの多い施設である。感染症が発症すると流行は瞬く間で、個人からクラスへ、クラスから園全体へ、園児から家族・地域へと伝播していく。

保育園児の健康を守るためにも、予防接種で防げる感染症はできるだけ予防接種を受け流行を最小限に防ぐ必要がある。こうしたワクチンの接種率の向上のためには、保護者負担が大きい任意接種の定期接種化が切に望まれる。

参 考 資 料

- 1) 全国保育園保健師看護師連絡会. 保育園児の予防接種状況及び感染症状調査及びアンケート調査. 保育所保健 2011; 22: 128-136.
- 2) 全国保育園保健師看護師連絡会. 保育園における感染症対策 DVD. 2012.
- 3) 厚生労働省. 保育所における感染症対策ガイドライン. <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/pdf/hoiku02.pdf> (20130216)